

# 方正地区日本人公墓——友好の原点を歩く旅で考える

西 忠雄

7月の方正県は北国の夏空の下に、農閑期に入った田んぼが青々とした稲穂を伸ばし広がっている。松花江の南岸に広がるこの地域は、丘陵地帯に囲まれるように平地が広がり、彼方には低い山並みが連なっている。北国のさわやかな夏の空気に包まれた広がり、かつて想像を絶する悲惨なドラマが繰り広げられ、人びとの数だけあったさまざまなエピソードの存在すら思わせないような静けさを保っている。

北国特有の夏の白い太陽の下に、シーンと静まり返っている典型的な北方農村のたたずまいの中で、この地で繰り広げられた歴史的事実と秘められている厳しい思いを考えると、そのあまりの重さに、さわやかな空気と白い太陽に包まれているだけに言葉を失わざるを得ない。

郊外の田畑がと切れ丘陵地帯に懸かる辺りに、彼方に砲台山を眺めて松林に囲まれたさわやかな「中日友好園林」がある。「方正地区日本人公墓」「麻山地区日本人公墓」「中国養父母公墓」が並び、稲作技術者藤原長作の記念碑といくつかの日中友好と平和を願う記念碑がある。公墓の周りは日本各地からの団体、開拓団関係者による記念植樹が植わっている。

日中国交回復以前の「特殊な時代」、散在する遺骨を埋葬したいと思った一人の残留婦人の願いに、唯一の日本人公墓として建立を認めた周恩来総理の思想と高度な政治判断、「日本の庶民の墓であり、彼らに罪はない」として文革の時代も守り続けてきた現地の人びとの心情、それに応え中国人養父母の公墓を設け無限の感謝を表し交流を続けている開拓団関係者の思い。ここで繰り広げられている日中間の歴史的事実と人びとの思いは、現在の日本にとって大変な重みを持つ課題として記憶し続けなければならないと思う。

方正県の夏の太陽の下で、「日本は過去の歴史を総括しきれていない」ということを改めて考えざるを得ない。方正地区で繰り広げられた悲惨な歴史を担わされたのは、国家の意思に振り回された「庶民」である。悲惨な日中間の歴史の中で作られたそれぞれの感情を修復し、二度と繰り返さないことを誓い行動しているのも庶民である。日本政府、日本そのものがこれらの事実に対して、いまだ続く棄民政策を謝罪し応えたかは、肯定する言葉がかならずしも見つかるわけではない。

満蒙開拓団・満蒙開拓青少年義勇軍と「満州」侵略の歴史は、徹底的に解明され記憶していかなければならないが、それを生み出した日本の政治社会構造・風土を明確に認識していくことがより一層必要なことだと思う。戦前の軍国主義日本は、敗戦と東京裁判、平和憲法制定で生まれ変わったとは言い切れないところがある。もちろん絶対多数の日本人は、敗戦の事実と軍国主義社会の過ちを真剣に受け止め、平和憲法の下で大変な努力を続け今日があることは確かなことであるが、戦前の軍国主義社会を生み出した社会につながる政治風土が完全に清算されたとは思えないのである。

アジアの国々から時折突きつけられる厳しい反日批判と反日行動は、相手国の「愛国教育」の結果であるとはいえない面があることを厳しく認識しなければならない。加害者と被害者の関係は解消されたわけではないということを常に認識する必要があるだろう。

「方正地区日本人公墓」を生み出した状況を作り出したかつての時代を、いまだ評価する政治指向を持った輩を総理に就任させる政治社会風土が日本にはあり続けるということを考える必要があるのではないか。

「歴史を鑑として未来に向かう」というフレーズは、中国側が対日関係で指摘する言葉であるが、日本人は必ずしも冷静に受け止めていないところに問題があり続けると考えている。

2007年4月訪日した温家宝総理は国会で、「歴史を鑑とすることを強調するのは、恨みを抱え続けるためではなく、歴史の教訓を銘記してより良い未来を切り開いていくためだ」と語った。福田康夫総理は、「長い歴史の中でこのように不幸な時代があっても、これをしっかりと直視して子孫に伝えていくことが我々の責務であり、戦後日本は平和国家の道を歩み国際社会に協力してきたことを誇りに思うが、そうした誇りは、自らの過ちに対する反省と被害者の気持ちを慮る謙虚さを伴ったものでなくてはならない。過去をきちんと見据え反省すべき点は反省する勇気と英知があつて、初めて将来に誤りなきを期すことが可能になる」(2007年12月北京大学)と中国の若者達に語った。

ふたつの演説は日中双方にテレビ中継され深い印象を与えたが、日中双方の国民のナショナリズムの底流にはこれとはそぐわない流れがあり、政治的摩擦が表面化しやすい状況が続いている事を見しておく必要がある。

福田総理は日中両国関係に関して「日中の歴史を俯瞰する時、長い、実りの多い豊かな交流があったことを忘れてはならない」と指摘し、両国間の政治的摩擦の心理的根源について「きわめて短期間に大きな発展を遂げた中国、巨大な存在として出現した隣人に対して、日本側ではどのようにお付き合いすべきか心の準備ができていない面がある。中国側でも、日本の国際社会でより大きな政治的役割を求めていることに、複雑な感情があるように見受けられる」と指摘したが、日本と中国の社会の中には克服しなければならない課題があることを、今一度考える必要があると感じている。

方正県の「中日友好園林」に示されている日中友好と不再戦・永久平和の決意、さらに周恩来総理が示した国際主義の精神を確認し、犠牲となった日中それぞれの庶民を慰霊することも大切なことであるが、同時に、いま起きている日本の現実を点検していくことがもっとも重要ではないかと考えるのである。

<にただお、元日本国際貿易促進協会「国際貿易」編集長、日中経済ジャーナリスト>